

地域と自然が描く「安らぎ」という絵

③③ 東京共済病院 (東京都目黒区)



中目黒公園から見た病院。関根課長おすすめの撮影スポットだ

借景——そんな言葉が似合う医療機関があってもいい。東京共済病院。近年、再開発が進む人気エリア、東京・中目黒に移って80年。渋谷や恵比寿、六本木にも電車で10分ほどとは思えない自然を、周囲の環境から借りている。

かつては築地にあった東京海軍共済組合病院を国家公務員共済組合連合会が承継。「南館」の竣工は2002年。今では中目黒のランドマークとなっている。それまでは海軍時代の建物を一部使用する平面展開の病院だった。天井は高く、むき出しの配管から蒸気が噴き出す。「軍艦」そのものだ。

現在の共済病院に当時の面影はない。緑を基調にした内装。何ととっても、最も大きな特徴は中目黒公園に囲まれているかのようなその立地だろう。

病院に隣接していた旧科学技術庁金属材料研究所がつくば市に移転することが決定。跡地には目黒区が防災公園を造ることになった。共済病院は敷地の一部を区と交換。区の要請で地域では初の老健施設を南館に3フロアを提供。「合築型」として組み入れた。機能性を重視し、区と一体になって医療・防災の拠点整備に取り組んできた。中目黒公園は共済病院の背景として欠かせない。



南館1階。コンサートや医学講座の会場としても使用する



10階食堂から中目黒公園を見下ろす。災害時の緊急避難場所でもある



中目黒公園側から眺める南館。やはり緑が目飛び込んでくる



3階屋上庭園。入所者が自らの手で丹精した植物たち



カフェに隣接する中庭。春や秋にはここでも喫茶を楽しめる



春の目黒川岸。桜の回廊がどこまでも続く人気スポット

「緑が患者にとってはいい。リハビリの一環として病院の裏から出て公園を散歩できる。病院の隣に広大な芝生があるのは素晴らしい。これも一つのアートといえるでしょう」(桑名信匡院長)

公園はボランティアによって造られた。四季折々の植物が楽しめるほか、経年による変化もある。

秋の「公園祭り」や掃除のボランティアなど、病院職員も積極的に参加している。「地域に愛される病院」の基点は公園とのかかわりから生まれた。

「公園の自然は本当に豊か。アオダイショウやマガエルもいます」(関根義久・施設課長)

絵の多い病院でもある。院内の各所に展示されている作品には購入したものもあれば、寄贈されたものもある。植栽も印象的。南館オープンから2年間は本物の植物を使っていた。機能評価を受けるにあたって残念ながら造花に取り替えたものの、公園とのつながりは今も空間の中で生かされている。

1階のカフェとパン屋さんは地域の隠れた人気店。香ばしい臭いは病院らしさを感じさせない。

「駅からの道程も格好の借景。春には目黒川沿いの桜が満開になる」(池田克彦・事務部長)

景色を借りる病院。お返しは安らぎだろうか。

地域に安心感与える高度医療と介護

③④南大和病院 (神奈川県大和市)



大和(YAMATO)の「Y」を表したロゴマークが昨秋付けられた

南大和病院は昨年、開院30周年を迎えた。病院が建つ大和と横浜・藤沢の市境は、前身の南大和診療所が開所した1976年当時、医療機関がなかった。池田貞雄理事長は「患者はいつでも誰でもすべて診る」との方針で診療所を開所。あまりの忙しさから、職員の間では「野戦病院」に例えられたという。

病院機能は2000年に新館(現1号館)に移設。06年には2号館を新築し、回復期リハビリ病棟と人工透析センターを開設した。病床数は同病棟も含め132床。地元だけでなく、隣接市の住民の外来・

入院もあり、地域の中核病院となっている。

開院当初から目指しているのは、「周辺地域の方々への貢献を最優先とした医療」。その実現のため、①常に時代の最先端を意識しながら②“出る杭はのびず”、後進を育てる③臨機応変・スピードを重視して——の三つの行動指針を掲げる。

地域は高齢化が進んでいる。清家幸治事務長は「高齢者が抱える疾患を総合的に診断・治療できるように、外科手術やがん化学療法、消化器内視鏡治療などに最新機器を導入しています。医師やコメディカルには専門知識を深めるため学会への



学会認定資格の取得が奨励されている。各部署の入り口に掲示されているスタッフの資格認定証



病棟中心に設けられているナースステーション。患者に安心感をもたらしている



食事や面会の場として利用されている食堂談話室。窓から望む緑で心身が癒やされる



まるでファミリーレストランのように豊富な選択メニュー



1号館と2号館をつなぐ廊下の壁は、職員が撮影した写真を飾る「展示室」になっている



リハビリテーション室。ウオーターベッド型マッサージ器は患者から好評だ(写真提供・秋元忍)

参加や認定資格の取得も奨励しています」と話す。

同病院グループには、ほかに三つの施設がある。通所リハビリセンターやレディース透析センターを抱える「南大和クリニック」、病院と在宅療養の間をサポートする介護老人保健施設「さくらぶらざ」、在宅での医療を提供する「南大和訪問看護ステーション」だ。「患者さんがいつまでも安心して医療が受けられるように、これらの施設と連携をとっています」と清家氏。

チーム医療の一環として、同病院は01年、全国に先駆けて「栄養サポートチーム(NST)」を立ち上

げている。NSTとは職種の壁を超え、栄養管理を実施するチームのこと。症例や疾患に応じて栄養管理計画をつくり、栄養療法を行っている。

「患者自身が食べて治す」ことを支援するため、選択メニューが豊富なのも特徴の一つ。和洋中華が約50種類あるほか、特別メニューとしてうな重やビーフステーキなども廉価で提供している。「食事制限のない入院患者さんに好評です」と清家さん。

高度医療と介護のネットワーク、患者本位のサービスの提供は、高齢化する地域住民に安心感を与えている。